

# I 供給関係

## 3 水稲もち米の主産地情報

### (2) 主産地における水稲もち米の作付動向等

産地	近年の作付状況	平成30年産の作付動向	その他
北海道	・団地化により作付面積がほぼ固定化されており、加工用も含めた生産体系により、もち米全体の作付面積は維持。	・前年産の作付面積と同程度となる見込み。	・約8割は北海道外へ販売。 ・主食向け約8割、加工用途向け約2割。加工用途向けでは、包装もち(約6割)、米穀粉(2割)、米菓(2割)。 ・近年、コンビニの赤飯・おこわおにぎり向けの需要が増加。 ・「はくちょうもち」「風の子もち」「きたゆきもち」の3品種で約9割を占めており、品種別作付比率もほぼ一定で推移。 ・「しろくまもち」の後継品種として開発された「きたふくもち」は硬化性が高く、米菓に適した品種(段階的に作付拡大予定)
岩手	・近年の作付面積は横ばいで推移。	・主食用米のもち米の販売が鈍くなっていること等から作付面積は減少する見込み。 ・品種別では、低温・寡照の影響により収量・品質が「ヒメノモチ」より悪かった「もち美人」を中心に減少する見込み。	・県外への流通が主流。 ・主食用が約7割、包装もち、米菓など加工向けが約3割
宮城	・平成26年産うるち米の米価低迷により、平成27、28年産は作付面積が増加。平成29年産は、需要者の在庫がダブついていることから、生産抑制が行われ、作付面積は減少。	・依然として需要者の在庫がダブついていることから、生産抑制が行われる見込み。	・県外への流通が主流。 ・主食用への比率が大きいですが、包装餅など多岐に販売。 ・「みやこがねもち」が9割以上を占める。
秋田	・平成26年産うるち米の価格下落等の影響もあり、平成27、28年産は作付面積が増加。平成29年産は平成28年産と同程度の作付面積。	・全国的にもち米の在庫が過剰であるため、売渡価格が低下しており生産は抑制される見込み。	・加工用もちの作付けが平成22年産米以降、大幅に増加し、平成29年産米の取組計画は23,000 <sup>ha</sup> で、全国の加工用もちの約4割程度を占めている。 ・「きぬのはた」、「たつこもち」が中心。
山形	・平成26年産うるち米の価格下落等の影響もあり、平成27、28年産は作付面積が増加。平成29年産は、平成28年産の供給量の増加を受けて作付面積は減少。	・種子の供給量が大幅に減少していることから、作付面積は減少する見込み。これは、全国的なもち米の供給過剰による価格の低迷や、うるち米の価格高騰によりもち米からうるち米への作付け変更が要因と考えられる。	・販売先は県内が5割程度で、残りは首都圏がほとんど。用途は包装もちが5割程度。 ・「ヒメノモチ」が8割程度を占める。
千葉	・平成26年産うるち米の価格下落等の影響もあり、平成27年産米の作付けは大幅に拡大。平成28年産米は加工用もち米を中心に更に拡大。平成29年産は、需要者の在庫のダブつきから生産が抑制され、作付面積は減少。	・依然として実需在庫がダブついていること、種子の注文も昨年より4~5割減となっていることから、作付面積は減少する見込み。 ・加工用もち米の取組は、複数年契約があることから29年産並が見込まれる一方、主食用もち米は、価格低迷によりうるち米に転換する見込み。	・販売先は新潟県が6割程度、宮城県が2割弱、残りは自県を含む首都圏が主。 ・包装餅が6割程度、米菓用が3割程度となっており、包装餅が近年増加している。 ・「ヒメノモチ」「ふさのもち」が主流で、この傾向は変わっていない。
新潟	・平成27年産は、平成26年産までの生産抑制の反動から作付けが拡大。平成28年産は、加工用米を中心に更に作付け拡大。平成29年産は平成28年産と同程度の作付面積。	・もち米種子の受注数量が前年比1割減となっており、作付面積は減少する見込み。これは、29年産の天候不順による収量、品質の低下や、全国的な過剰在庫による価格の低迷などから、生産者の作付意欲が低下していることが要因と考えられる。	・県内に米菓、包装餅メーカーが多いことから、県内販売が主体。特に包装餅メーカーへの販売が主体。 ・新潟県は、産地交付金で加工用米の多収性品種取組支援(12,000円/10a)を設定。
佐賀	・平成26年産の作付面積が販売計画を下回ったことに加え、作柄が悪くなかったことから、平成27年産は作付けを拡大。平成27年産以降は同程度の作付面積で推移。	・平成29年産と同程度の見込みであるが、新規の需要者と契約して加工用もち米の作付けを増加させ、その分主食用もち米を減少させる予定。	・新潟、愛知、大阪等、県外への流通が主流。 ・「ヒヨクモチ」が9割以上を占める。
熊本	・平成25、26年産と生産量は減少傾向にあったが、平成27年産は作付けを拡大。平成27年産以降は同程度の作付面積で推移。	・主食用もち米は平成29年産と同程度の作付面積が見込まれるが、加工用もち米については、複数年契約に対する助成の終了に伴い取組の減少が見込まれる。	・「ヒヨクモチ」の需要が多く、もち米の作付面積の大半が「ヒヨクモチ」。

注:農林水産省による農協等からの聞き取り結果。